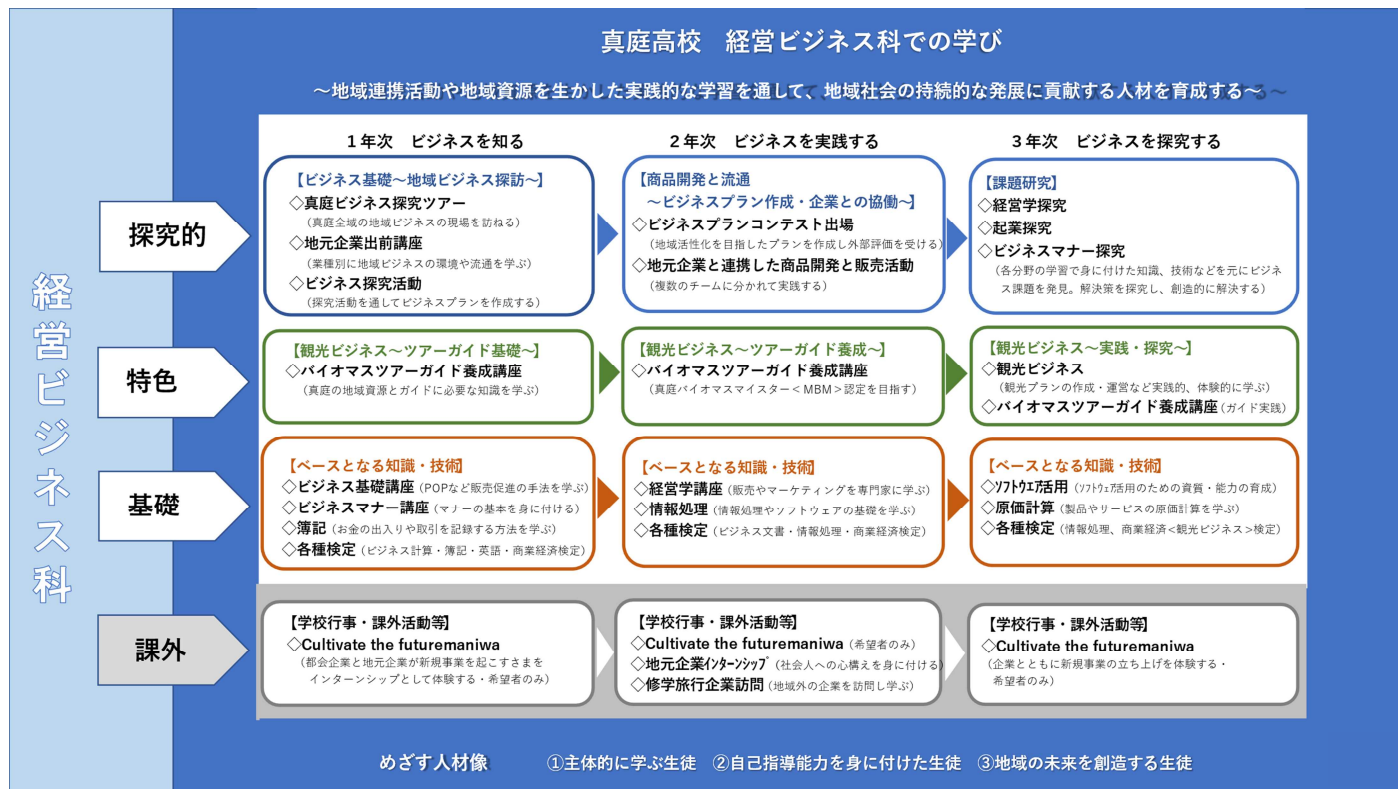


【経営ビジネス科のカリキュラム整理表】



○ビジネス探究ツアー

1年生は、ビジネス探究ツアーに出かける。郷育魅力化コーディネーターや地域協働活動推進員との協力で編成したコースは、単に施設を巡ることが目的ではなく、人に会い生き方を考えることを目的としている。ひるぜんワイナリーでは、自生する山葡萄でワインを作ろうと決意し、大学で学び直した社長や専務の話聞き、蒜山耕藝くどでは、ネットで販売すると商品がたった5分で完売するという、自然農の実践者である高谷ご夫妻の「自分たちが食べたいものしか作らない」という話や捨てないパン屋として全国に知られる田村さんの仕事に対する考え方を聞いた。湯原温泉八景の女将さんからは、一度廃業に追い込まれたホテルを二十代で任された人生ドラマやお客さんとともに年を重ねる宿でありたいと願う人間味あふれる話に心を打たれた。

■ 真庭ビジネス探究ツアー(北コース)

わたしたちの知らない真庭があった！

生き方を考える
人を学ぶ・仕事を学ぶ・地域を学ぶ



GREENable
HIRUZEN



ひるぜんワイナリー



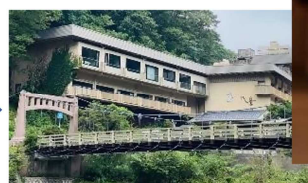
蒜山耕藝くど



捨てないパン屋 ドリアン



湯原温泉



湯原温泉 八景



南コースも実施した。廃校となった母校を複合施設として運営する芦田さん。特産のフルーツで地域を盛り上げる谷本さん。コミュニティをデザインする松尾さん、明治から続く老舗の岡本さん、河野さん。真庭を発信するあぐりガーデンの三村さん。みなさんの地域を想う話が、生徒たちの心に火をつけた。生徒のツアー後の感想には、自分たちも、地域のために力をつくしたいという思いがあふれ、手応えが感じられた。これらの学習において、担当者の意識や生徒の振り返りが重要だと感じられた。

■ 真庭ビジネス探究ツアー(南コース)

わたしたちの心に火がついた！



ウエダビレッジ: 芦田さん



きょうカフェ: 谷本さん



ろまん亭
松尾さん



岡本旅館
岡本さん



河野酢味噌
河野さん



真庭あぐりガーデン: 三村さん

○ バイオマスツアーガイドの養成

地域を自分の言葉で語れる生徒にしたいと、産業実務家教員の協力を得て、バイオマスツアーガイドの養成を授業化した。ガイド養成と聞くと知識を詰め込む学習と思われがちだが、そうではなく、観光局のスタッフからお客様をガイドする上での失敗談や難しさ、逆に喜びや、やりがいも語ってもらい、お客様への目配り気配りも含めて学習する。ガイドの原稿も自分で作るのである。最初は消極的だった生徒も、ガイドをやり終えると、達成感を感じ、自信を持つことができた。

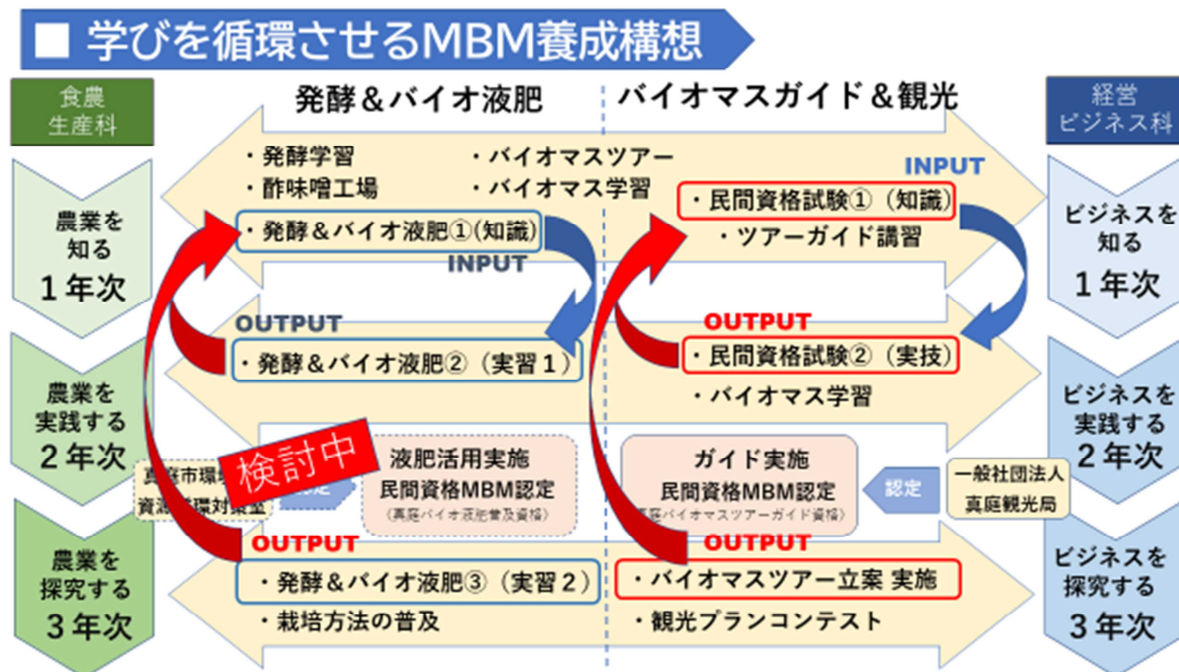
■ バイオマスツアーガイドの養成

地域を語れる人材に！



○バイオマスツアーガイドの養成構想

これは、真庭バイオマスマイスター、通称MBMの養成構想である。経営ビジネス科では、バイオマスツアーをガイドの養成や観光プランの学習につなげていくことになっている。認定を受けた上級生が下級生に向けてアウトプットすることで、学びが循環できるよう工夫している。また、地元敬老会や子供会のガイド等、実践の場を広げていきたいと考えている。食農生産科でも真庭の発酵やバイオ液肥の普及について、もう一つのMBM認定ができないか検討中である。



○地域と連携した商品開発

2年生では、地域資源を生かした商品開発にも取り組むが、生徒は、独りよがりな発想になりがちだった。そこで、真庭市産業政策課の平澤氏による、リサーチ講座を実施した。彼は元企業マンで広報・事業開発の最前線で活躍していた人物である。講座後には、生徒はアイディアを多角的に検討し、ブラッシュアップさせることができた。地元企業の方からもアドバイスをもらい、試作を重ね、商品化を目指している。現在、梨を使ったスムージーが完成している。

■ 地域と連携した商品開発

地域資源を活かして商品開発をしたい！



○産業界と連携した起業家教育

経営ビジネス科では岡山イノベーションコンテストに2年生全員が挑戦した。そのうち2チームが2次審査に進んだが、決勝には残れなかった。くじけず、再挑戦したいと意気込んでいる。課外活動で行われた、Cultivate the future maniwaは、新しいタイプのインターンシップである。食農生産科からも参加した。都市部企業と真庭市内の企業をマッチングさせ、0→1のアイデア創出から新規事業を立ち上げるまでを高校生が伴走し、プレゼン発表までを行う。新たな価値を見出す視点を持つことができ、起業のハードルが下がることを期待している。

■ 新たな価値の創造に向けて



岡山イノベーションコンテスト全員参加
7チーム中2チーム2次審査進出

地域に生かす

OUTPUT

経と
課外

食農
課外

地域で学ぶ

INPUT



Cultivate the future maniwa
都市部企業5社×真庭市内企業5社

プレゼン発表

OUTPUT

○キャリア教育計画

令和5年度は真庭高校普通科の最終年度であり、進路指導は進学指導主体の指導となっていた。しかし、現在2年生に在籍する専門科生徒の多くが就職・専門学校進学を希望しており、キャリア教育の充実が必要である。現在、学年進行に合わせてキャリア教育充実を図っている。その中では、マイスター・ハイスクール事業での取り組みや様々な体験を綴ったポートフォリオをもとにキャリアパスポートの作成を行い、地域産業学習を進路指導に結びつけている。

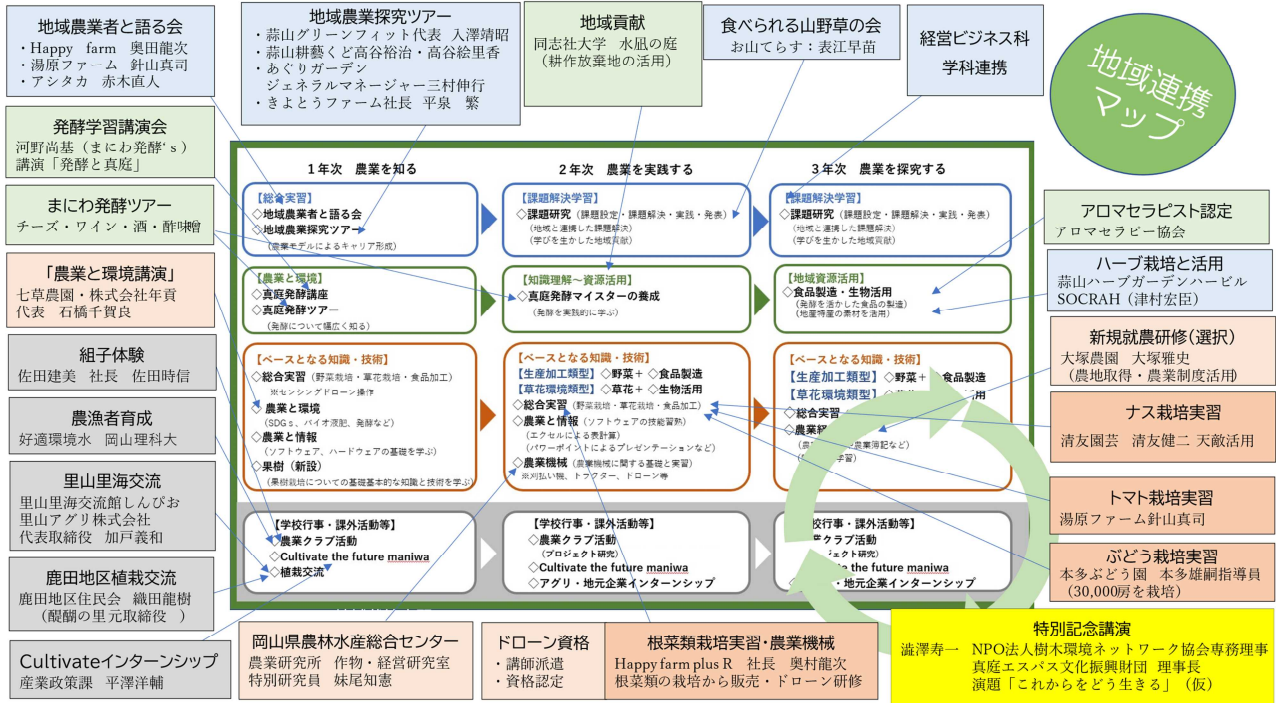
また、12月には真庭市産業政策課等の協力をいただき、地元企業11社の参加による「Maniwa Job Fair 2023」を開催し、進路学習を実施した。今後も地元企業等を中心としたキャリア教育を計画的に実施していき、地域の次世代を担う人材の育成を行っていく。



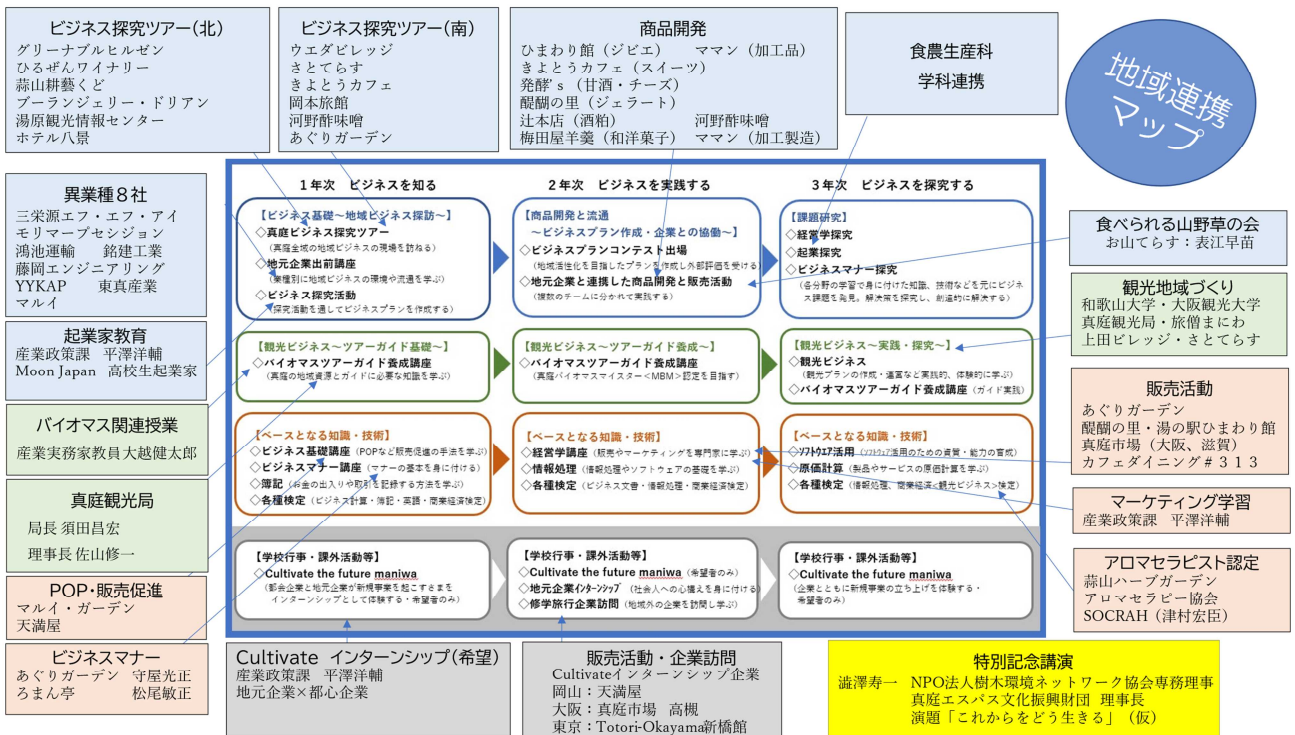
○地域企業等との連携

こういった場面でこういった企業等と連携することができるのか把握する必要があるが、CEO等が中心となって開拓した連携可能な地域企業等を、食農生産科・経営ビジネス科の3年間の学びの体系表に落とし込み、次表のとおり一覧性を高めた。

地域連携マップ（食農生産科）

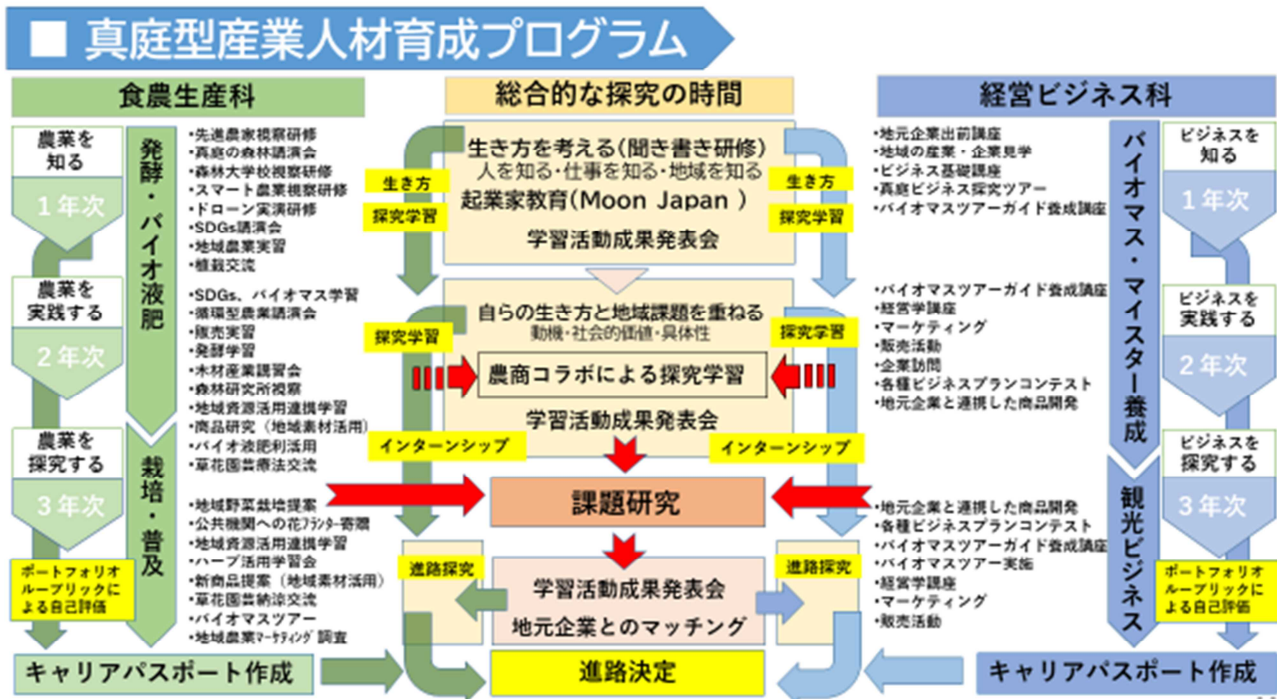


地域連携マップ（経営ビジネス科）



7 地域資源を活用した学習カリキュラム

真庭高校では、3年間の専門教科において次世代の地域の担い手育成と実践力の養成を目指し、「真庭型産業人材育成プログラム」をブラッシュアップしながら多くの地域連携学習を実施した。「真庭型産業人材育成プログラム」は、総合的な探究の時間「真庭トライ&リポート（TR）」において探究学習の手法を身に付けることと、専門教科において実施する地域をフィールドとした地域連携学習の2本柱で構成している。



TRは、平成22年から普通科・看護科において実施してきた。令和4年度では、その流れを踏襲して実施したが、マイスター・ハイスクール事業推進委員会・運営委員会で「専門科のTRとすべき」の御意見をいただき、令和5年度は、専門科ごとにグループ編制・テーマ決定を行った。探究テーマは生徒の興味・関心により、専門科ならではのテーマで地域をフィールドとした探究活動が実施できた。しかし、事業当初から取り入れようと計画していた“聞き書き”に取り組むグループがなかったことは残念であった。年間を通して活動した成果は、令和6年2月3日（土）に学校及び近隣施設で行った成果発表会で、大学関係者3名・真庭市・地元関係者・県外高校・保護者等を招いて発表した。



食農生産科・経営ビジネス科の専門教科の学びは、8月のマイスター・ハイスクール事業推進委員会・運営委員会に3年間の取組案を示した。その後、真庭市・郷育魅力化コーディネーター等の協力のもと「学科での学び」をフローチャート化（前記6 地域産業学習カリキュラム）し、基本的な流れを作成し取り組んできた。

食農生産科では、1年次「農業を知る」、2年次「農業を実践」、3年次「農業を探究」というテーマで学習を進めている。令和5年度に実施した主な地域連携活動は次表のとおりである。

実施月日	行事名	場所	学年
5月21日	きたまちマルシェ	真庭市久世	2年
7月14日	バイオマスツアー	真庭市蒜山・久世	1年
9月24日～ 10月1日	落合まちかど展覧会	真庭市落合	
10月24日	みま咲未来フォーラム 2023	津山市	2年
11月1日	先進的農業経営者訪問研修	真庭市三崎・勝山・蒜山	1年
11月15日	地域貢献活動植栽交流会	真庭市鹿田	1年
11月24日	ハーブ活用学習会	真庭市蒜山	2年
12月11日	発酵に関する講演会	本校	1年
12月26日	高校生探究フォーラム 2023	岡山コンベンションセンター	2年
1月29日	小学校での出前授業（組子）	真庭市立河内小学校	2年
1月31日	地域企業見学	河野酢味噌製造工場	1年
2月1日	小学校での出前授業（組子）	真庭市立落合小学校	2年
3月中旬	ドローン講習会	本校	1年
3月18日	卒業式「花文字」の設置	真庭市立落合小学校	2年
通年	真庭組子研修	真庭市	2年

経営ビジネス科では、1年次「ビジネスを知る」、2年次「ビジネスを实践」、3年次「ビジネスを探究」というテーマで学習を進めている。令和5年度に実施した主な地域連携活動は次表のとおりである。

実施月日	行事名	場所	学年
7月14日	バイオマスツアー	真庭市蒜山・久世	1年
9月25日	真庭ビジネス探究ツアー（北コース）	真庭市蒜山・湯原	1年
11月3日	経営実践実習	道の駅醍醐の里	1年
11月21日	真庭ビジネス探究ツアー（南コース）	真庭市勝山・落合・北房・久世	1年
12月～3月	バイオマスツアーガイド養成講座	本校	1年
3月20日	経営実践実習	道の駅醍醐の里	1年
6月～7月	バイオマスツアーガイド養成講座	本校・真庭市蒜山・久世	2年
9月～10月	岡山イノベーションコンテスト	本校・岡山市	2年
通年	商品開発	本校	2年
10月～	Cultivate the future maniwa2023	真庭市役所他	2年

8 学校設定教科・科目の研究

真庭高校では、マイスター・ハイスクール事業を進めるに当たって念頭に置いたことは、「事業終了後も継続できる学び」の創出である。「継続性のある学び」を考えたときに、真庭高校独自の学校設定教科・科目の設定を行った場合、担当教員の負担の大きさや転勤等によって継続性が損なわれる恐れがあり、必ずしもよい結果が得られるとは考えにくかったため、現在の教育課程で設定している教科・科目内で実施可能かを検討した。

令和3年度からの事業展開の中で、各教科・科目に学習内容を設定して実施が可能かを検討した。その結果「授業内での実施が可能であり、学校設定教科・科目を設定するには及ばない」との結論を出した。

9 真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動

- ・保・幼・こども園及び小・中学校との連携活動については、学校独自に植栽交流等を実施した。さらに、真庭組子の制作活動を通して得た知識・技術を使って、小学校への出前授業を行った。真庭市郷育魅力化コーディネーターに小・中学校との連携をコーディネートしていただく機会が持てなかったが、近隣の小学校等との交流が持てた。
- ・聞き書きの手法の取り入れについては、令和5年度は実施できなかった。総合的な探究の時間を専門科としての内容にシフトしていこうとした際に、聞き書きを希望する生徒がいなかったことから実施ができず、大変残念であった。令和6年度では、1年生の総合的な探究の時間で取り組む方向で検討しており、真庭市郷育魅力化コーディネーターにも協力していただく計画としている。

10 活動を支援する体制の構築

真庭市は、県立高校の設置者ではないが、就学前から高校まで一貫して、地域みんなで子育てを応援する立場から、これまで市民総掛かりで高校生の学びを応援し、地元自治体としてできる範囲で、市内県立高校2校3校地（真庭高校・勝山高校・蒜山校地）の教育内容・環境の充実を通して特色を磨き上げ、魅力化の向上を図るべく取り組んできた。特に真庭高校については、本事業開始時点では次のような方策を通じ、高校の活動支援に寄与する計画であった。

- ①高校魅力化コンソーシアム推進本部（仮称）を置き、コンソーシアムを質・量共に拡充
- ②地域資源を活用したり、校種間連携を進めたりする高校の学習を支援
- ③高校との連携・協働や高校独自の取組を交流・発信するシンポジウムを開催
- ④高校の姿を市内外に知らせる情報発信や高校生の通学環境充実に支援

この4点に係る進捗・評価については、次のとおりである。

まず①についてであるが、市役所内では「教育魅力化プロジェクトチーム」を立ち上げ、全庁的に取り組む体制を整備した。これを端緒に様々な方面へつながりを広げていくような方策も探っていたところであるが、各校地との協議・意見交換や、進路実績等を考慮する中で、置かれた現状や抱える課題にはそれぞれ違いがあり、それらの違いに合わせた対応を取ることが適切と考えるに至っている。したがって、一律にコンソーシアムという形で組織化することは当面見送り、緩やかなつながりを維持しながら、それぞれの課題等を踏まえた人・財の直接支援や、地域連携に向けた側面支援を行いたいと考えている。

当面は、令和6年度から設置される学校運営協議会の運営を見守り、あるいは運営に関わるとともに、その他学校外から支える体制については、市としては学校の求めに応じて、学校が地域の支援者となつながら、地域との連携が円滑に進むような側面支援を引き続き行っていきたいと考えている。例えば、地域とつながり、教育プログラムをともに実践していけるコーディネーターの配置や、学校の実務担当者や場合によっては生徒と、地域の応援者とが意見・情報の交換等を行う合同会議の開催が考えられる。

以前、令和4年度には地域づくり団体の構成員でもある若手事業者らを交えた小規模な「合同会議」を月1回ペースで開催し、地域で支える体制を作っていくための検討を重ねてきたが、令和5年度は新しい教育課程の構築に注力したため合同会議を公務関係者のみで実施した。今後は、以前の方式を復活・発展させる方法を検討していきたい。

このような形を通じて学校運営方針を注視しつつ、将来的には市内全校地を支援するために意思ある団体・個人等の組織化を図ることを視野に入れていきたい。

また、地域との連携を進めるに当たっては、教職員が地元出身でないなど地元と強いつながりがない中

で連携の相手方を見つける必要があることから、学校からは誰がどんなことをできるのかという情報が欲しいという要望が早い段階で示されていたが、実現に至っていなかった。その中で、真庭高校と包括連携協定を結んだ同志社大学から、学校と地域を結ぶ協力の申し出があり、会議を経てコミュニティ・アプリ（仮称）開発の協力をしていただけることとなった。このアプリは、連携をめぐる関係者が登録することにより双方向で意思疎通ができるツールとして期待されている。

学校・市教委・地域とのつながりの確保には前述の合同会議の活用や、コミュニティ・アプリとの両輪で継続することが考えられる。

次に②についてであるが、地域資源の活用については、マイスター・ハイスクールCEOによる連携先の開拓や地元企業から派遣された産業実務家教員による授業の実施、さらには郷育魅力化コーディネーターによる探究的な学習の時間へのサポート等の人的支援とともに、地域から校内へ人材を招いたり、学校から地域へ学びに出て行く移動経費を確保したりするなど、地域連携に係るコストを負担する財政的支援を通じて、地域資源を活用した学習を行うことができた。

校種間連携については、高校の尽力により小学校と植栽交流、木工体験や課題研究で地域企業に出向いたことに端を発した組子作成などの交流事業を実施することができたが、市立中学校との関わり方については、引き続き検討・改善の余地があると考えている。

新たな取組としては、学校間交流として別の市内高校のバイオマスツアーで、真庭高校のMBM生徒がガイド又は事前授業を実施することができた。

さらに③についてであるが、令和3年度に高校魅力化シンポジウムを開催し、保護者、中学生、教員、地元産業界等に幅広く高校の魅力と地域への必要性について意識の共有・向上を図った。YouTube ライブやその後のアーカイブでの視聴も合わせ1,300回再生を超えるなど市民意識の向上に一定の効果を得られたと考えている。また、ワークショップも開催し、中学生と高校生をZoomでつなぎ高校での学習内容について意見交換をするなど、生徒が主体的に高校の魅力について語る場を作ることができた。

最後に④についてであるが、情報発信については広報素材（HP構築、学校紹介パンフレット等）への財政的支援、地元ケーブルテレビの番組への生徒出演、市広報紙（広報まにわ）での特集、市ホームページ（VIVA まにわ）での紹介、市内小中学校・保護者が使用するアプリ（コドモン）への学校広報紙配信などの取組を行った。広報戦略については学校の協力が得られればより効果的な方策を提案したり、ともに検討したりしていきたいと考えている。

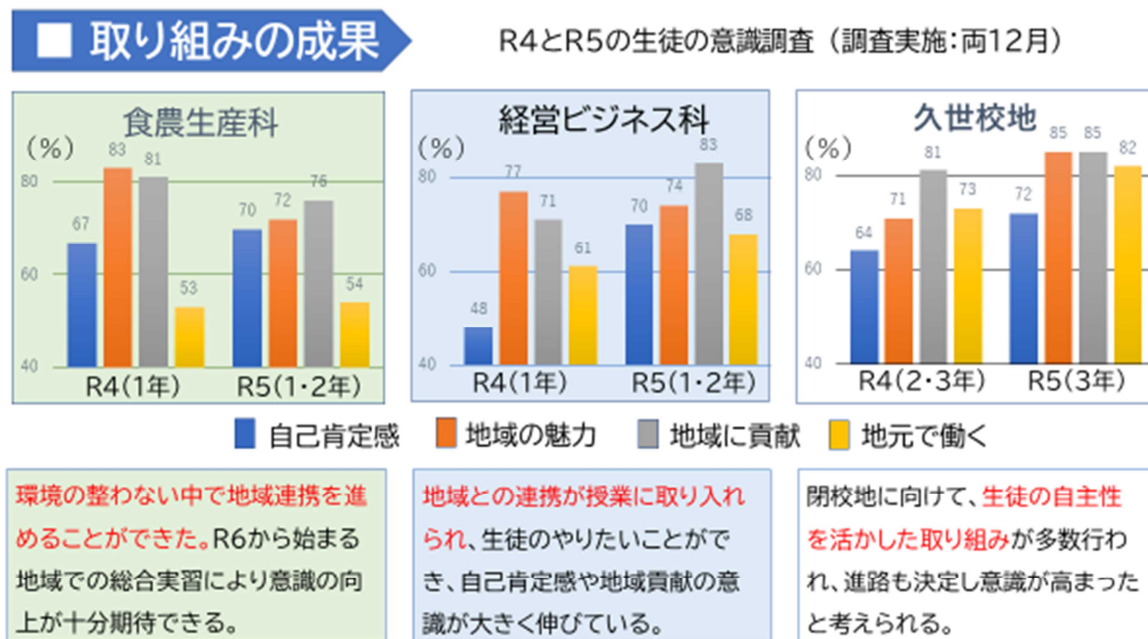
通学環境充実については、市内高校への通学手段としてコミュニティバスまにわくんを2路線以上乗り継いで利用する場合に、一乗車運賃（200円）で乗車できる特例措置を実施している。令和5年度で32名が利用登録しており、通学負担の軽減に寄与している。

このように、事業開始後の状況認識、情勢変化等により当初計画から変質しつつある取組もあるが、今後も高校魅力化向上への支援を行う姿勢に変わりはなく、情勢に応じてブラッシュアップしながら柔軟に対応していきたいと考えている。

11 取り組みの成果

取り組みの成果として、生徒の変容の状況をアンケートに基づいて考察した。考察に当たっては4つの観点について生徒の肯定的な割合を比較した。（どちらも12月末の調査結果で、3学期の取組を反映しておらず、在籍の関係で母数は異なる。）

食農生産科では、2観点を下げており、環境整備に追われ、授業における地域連携の遅れが現れた結果となった。しかし、令和6年度からは、地域での総合実習が展開できるようになり、生徒の意識は向上させることができると見込んでいる。経営ビジネス科では地域との連携を授業に積極的に取り入れることで、自己肯定感や地域への貢献意識が大きく伸びている。地域の人々の生き方にふれる体験が有効だったと思われる。久世校地では、閉舎に向け、生徒の自主的な活動を増やすことで、生徒の意識が大きく伸びており、今後の参考となる。



12 課題と今後の取り組み

■ 課題と今後の取り組み

【人的・組織的課題⇒取組】

- 専門科目だけの改革にしない ⇒ 全職員の意識改革・リーダーシップ
- 校内推進と支援組織の整理 ⇒ 校内体制整備・学校運営協議会に一本化

【授業課題⇒取組】

- 地域との対話を起点とした授業実践 ⇒ 地域と語る会等の実施
(郷育魅力化コーディネーターの活用)
- 振り返りの充実 ⇒ 「聞き書き」の積極的導入
- 学科連携 ⇒ 総合的な探究の時間や課題研究での連携

【地域連携課題⇒取組】

- 地域・産業界との情報共有 ⇒ コミュニティアプリの制作(同志社大学)
- 産業界と連携した総合実習 ⇒ 最新技術と資格取得
(Happy Farm plus Rとの連携)
- 産業界と連携した食品加工 ⇒ あぐりガーデンとの連携

令和5年度は、事業指定最終年度であった。令和6年度は新学科の完成年度となると同時に全面的に専門高校化され、3年次のカリキュラムが実施に移される。これまでの取組から組織・授業・地域連携上の課題を挙げ、それに対する今後の取り組みをまとめた。

生徒獲得が高校存続のカギであり、校内の意思決定には、スピード感が求められる。特に全てに影響する、教職員の意識改革と校内の推進体制の整備は重要であり、自走のための推進体制を構築する準備を進め実行していく。また、専門教科の学びについて、さらに地域と結びついた内容を充実させていく計画である。

(1) 自走に向けた課題と方向性【人的・組織的課題⇒取組】

●校内推進と支援組織の整理 ⇒ 校内体制整備・学校運営協議会に一本化

事業期間中は運営委員会と事業推進委員会が事業推進の軸となり、CEOを旗振り役として進めてきたところであるが、事業期間内に全てが完成したわけではなく道半ばである中、事業を継続し、あるいは事業そのものでないとしてもその考え方を学校運営に反映させていくために、事業期間終了後にその機能をどこに求めるのかは課題の一つであった。

市教委としては、まずは、マイスター・ハイスクールの考え方を学校運営方針に反映させる手段として、令和6年度から真庭高校にも設置される予定の学校運営協議会への継承を提唱した。

また、マイスター・ハイスクールや地域連携の考え方を確実に反映させる観点から、協議会の委員構成についても提言を行った。

さらに、学校運営協議会を実働部隊として運用することは事実上困難なため、実働部隊として、学校内の体制と学校外から支える体制の両面が必要だと考えている。

●専門科目だけの改革にしない ⇒ 全教職員の意識改革・管理職のリーダーシップ

学校内の体制は、校内の隅々までその方針が徹底し、教職員が一致して目的達成に邁進できるよう、しっかり整える必要がある。令和6年度は各学科の完成年度であり、所定の教員数が配置される見込みであり、その面での不安は解消される。

しかし、特に進学、就職にかかわらず卒業後の進路という出口を見据えたキャリア教育という観点から考えると、本事業の目指してきたところはこれまで中心に関わってきた管理職や専門教科の教員だけの問題ではなく、進路指導担当教員や、普通教科教員、看護科教員等の心の持ち方、取組も重要であると考えている。本事業期間中に蓄積したノウハウを基に、これらの教職員も含め学校全体として主体的に関わる環境づくりに取り組んでいきたい。そのためには、管理職のリーダーシップや、旧管理機関（市教委・県教委）との対話も肝要と考えている。

(2) カリキュラムに関する課題と方向性【授業課題⇒取組】

●地域との対話を起点とした授業実践 ⇒ 地域と語る会等の実施（郷育魅力化コーディネーターの活用）

現行は、地域からの依頼や校内での情報提供により、教員側で選択肢を用意し、その中から生徒が選び、活動に入っていくという形態が多い。TRのテーマ設定、課題研究、ボランティア等においてその傾向が見られる。これには授業時間数や教員のマンパワーの問題などやむを得ない事情があることは理解できるが、一方で、地域からは0→1の時点で生徒と関わりを持ち、課題の発見から協働したいという声もある。この0→1からの関わりは、起業精神の涵養や生徒たちが新たな価値を見出す視点を持つことができるなど有益な取組という意見もある。

このように依頼による受け身の活動だけではなく、生徒が地域と語り合う中で、課題を見つけ解決

へのアクションを起こすという展開ができるよう、その障壁を取り除くなど方策を検討する必要がある。

●振り返りの充実 ⇒ 「聞き書き」の積極的導入

「聞き書き」の取組については、継続的に人に会い、話を聞き、文章にしたためることで自らの生き方、働き方を考えるに当たり大変有効とされているが、令和5年度においては「聞き書き」に長けた郷育魅力化コーディネーターの派遣準備を行い、総合的な探究の時間を活用して行うメニューの一つに位置付けられていたものの、十分な取組に至らなかった。「聞き書き」の有効性を教職員に理解してもらう取組等も含め、引き続き検討していきたい。

●学科連携 ⇒ 総合的な探究の時間や課題研究での連携

学科連携については、当初は学校設定教科・科目の設定も視野に入れた検討を行ってきたが、令和5年度は、事業推進委員でもあるCEOや郷育魅力化コーディネーターの助力を得て、管理機関や担当教員で構成した合同会議・担当者会議で検討作業を行い、まずは学科の教育内容をしっかり足固めし、特色を見出すことに注力した。その結果、当面は学校設定教科・科目の設定はせずとも、TRや課題研究の時間を使って学科連携の取組を行うことができ、それを特色として打ち出せるという考えに至った。

取組は、食農生産科による生産物を、経営ビジネス科による商品開発やビジネスプランにつなげていくような方法で可能性が考えられるが、具体は引き続きの検討課題である。状況によっては、将来的に学校設定教科・科目設定の可能性はあるものと考えている。

(3) 地域との連携に関する課題と方向性【地域連携課題⇒取組】

●地域・産業界との情報共有 ⇒ コミュニティ・アプリ（仮称）の制作（同志社大学）

地域の教育資源を活用するといっても、教職員が地元出身でないなど地元と強いつながりがなく中で連携の相手方を見つける必要があることから、学校からは誰がどんなことをできるのかという情報が欲しいという要望が早い段階で示されていたが、実現に至っていなかった。その中で、真庭高校と包括連携協定を結んだ同志社大学から、コミュニティ・アプリ（仮称）開発の協力申し出があった。このアプリは、連携をめぐる関係者が登録することにより双方向で意思疎通ができるツールとして期待されている。

その他学校外から支える体制については、市としては学校の求めに応じて、学校が地域の支援者となつたり、地域との連携が円滑に進むような側面支援を引き続き行っていきたいと考えている。例えば、地域とつながり、教育プログラムをともに実践していけるコーディネーターの配置や、学校の実務担当者や場合によっては生徒と、地域の応援者などが意見・情報の交換等を行う合同会議の開催を検討している。

学校と市教委間、あるいはそれに加えて地域とのつながりの確保にはこの合同会議の活用や、コミュニティ・アプリとの両輪で継続することが考えられる。

●産業界と連携した総合的な実習 ⇒ 最新技術と資格取得（Happy Farm plus Rとの連携）

真庭高校の場合、学科改編に伴い専門科高校に衣替えするに際し、校地統合というもう一つの特異な事情があり、前身が農業科専門高校であった久世校地と比べ、農業系学科が新設された落合校地では農業実習地や実習棟、実習機器等農業実習に係る施設設備の規模・能力等は大幅に縮小することとなった。

このように施設設備面に制約が生じる中では、これまでの校内で全てが完結する学び方ではなく、地域へ出て、地域の教育資源を活用しながら学びを進めることが必須であった。

そこで農業実習地については民間事業者の施設を使用させてもらい、生徒側は大規模農場での総合実習を経験したり、ドローンなどの各種資格取得が可能となったり、また事業者側は生産物の売払いとともに、将来的には商品開発につなげられる可能性があるなど、事業者と学校との双方に意義のある取組と認識しており、積極的に進める意思がある。とはいえ、民間施設の使用に当たっては費用負担の問題などクリアすべき課題もあり引き続き調整を図っている。

なお、真庭型マイスター・ハイスクールは特定の企業等をパートナーとするのではなく、地域から人材を招き、地域へ出て学ぶことが特色の一つであり、自走に当たっては自ずから財政面の課題が生じる。これについては現時点では県費だけではなく市費による支援で実施できる要素が大きいですが、自走による収支の均衡を目指し、実習経費（県費）の取扱いなど引き続き検討すべき課題があると考えている。

●産業界と連携した食品加工 ⇒ あぐりガーデン等との連携

上記の施設設備面の制約は食品加工にも影響しており、校内の実習室で加工生産した食品類については販売の許可が下りないこととされている。このことから、食品加工についても地域の関係企業の協力を得ながら行い、販売は校内や地域の拠点、イベント等で行うという枠組みが現実的である。

協力の申し出がなされている業者もあるが、具体的な連携には至っておらず、引き続き取り組む必要がある。

岡山県立真庭高等学校

〒719-3144

岡山県真庭市落合垂水448-1

TEL (0867) 52-0056

FAX (0867) 52-0936

<https://www.maniwa.okayama-c.ed.jp/>

岡山県真庭市教育委員会

(教育総務課)

〒719-3292

岡山県真庭市久世2927-2

TEL (0867) 42-1085

FAX (0867) 42-1416

<https://www.city.maniwa.lg.jp>

<https://viva.maniwa.city>

(遊びと学びの場づくり応援サイト VIVA まにわ)

岡山県教育委員会

(高校教育課高校魅力化推進室)

〒700-8570

岡山県岡山市北区内山下2-4-6

TEL (086) 226-7825

FAX (086) 224-2535

<https://www.pref.okayama.jp/soshiki/348/>